

シユパイツァー、ガンジーととも海外で「20世紀の三大聖人」ともたたえられながら、戦後忘れられたキリスト教社会運動家の賀川豊彦（1888～1960年）が、貧民街で救貧活動を始めて100年。その「相愛互助」の思想が、貧困や格差などを克服する手がかりを与えるとして脚光を浴びている。

（植田遊）

賀川豊彦は多面的だ。労働争議、農民運動、協同組合創設、セツルメント活動（地域福祉事業）を指導した活動家であるとともに、戦前400万部のベストセラーとなった自伝小説『死線を越えて』の作家として知られる。プロテスタントの牧師として伝道する一方、「世界国家」を構想した平和運動家でもあった。神戸市生まれの賀川は幼くして両親を失い、育った徳島県でアメリカ人宣教師と出会い、16歳で洗礼を受けた。結核に侵され余命短いのと思い、ならばイエスに倣おうと決意。1909年、21歳で神戸市の貧民街に住み、病者保護や無料葬儀な

## 賀川豊彦 救貧活動100年



神戸市の貧民街で子どもたちと一緒にいる若き日の賀川（向）

# 「相愛互助」不況下で関心

どの救貧活動を始めた。  
 「おいしが泣いて、目が腫めて、お襟襟を更へて、乳溢いて、椅子にもたれて、涙くる。……」。「涙の二等分」は、貧民街の子どもの奇り添う生き方を伝える

詩として知られる。キリスト教関係者らは今年、「賀川豊彦献身100年記念事業」を展開。すでに数回のシンポジウムや映画『死線を越えて』の上映会が行われたほか、小説『死線を越えて』（PHP研究所）、『空中征服』（不二出版）が復刊された。12月22日には神戸市で記念式典が予定されている。

賀川豊彦記念・松沢資料館（東京都世田谷区）の加山久夫館長は「数年前から行事を企画していたところに、経済危機が重なった。

最底辺の人々の立場に立ち、兄弟愛の精神で互いに支え合うという『相愛互助』思想は、不況下で強い関心を集めている」と言う。特に注目されるのが、協同組合運動だ。一人一人は万人のために、万人は一人のために、という標語のもと、賀川は大正期から消費組合や医療利用組合、協同組合金融を先導した。日本協同組合同盟（後の生協連）の初代会長も務め、「生協の父」とされる。4月に母校・明治学院で行われたシンポジウムでは、野尻武敏・神戸大名舎教授（経済学）が「個人主義、物質主義、合理主義からなる近代文明

彼ほどの人材が育っていないのだから、積極的に社会にかかわる賀川の信仰のあり方は、もっと見直されている。今、盛んに言われている『友愛』とも重なる」と強調する。

また宗教学者の山折哲雄氏は、季刊誌「at」15号の賀川特集で、その時に「乳房」に対する強い憧憬があることに注目。「賀川のキーワードは母です。厳父との対極で、仏教の観音の系譜、マリア観音の水脈に連なっています」と述べ、キリスト者としては同伴者としてのイエスを描いた遠藤周作とともに、日本の伝統風土に生きて文学者であったことを指摘している。

賀川は第2次大戦で戦争に協力したと批判されているほか、現在からみると問題ある人種発言もしている。それが戦後に忘れられた要因にもなったが、加山館長は「それでも一貫して貧しい人の側に立った賀川を評価しても遅くはない」としている。



友愛精神に基づく協同組合主義が脚光を浴びる賀川豊彦（賀川豊彦記念・松沢資料館提供）

賀川豊彦記念・松沢資料館（東京都世田谷区）の加山久夫館長は「数年前から行事を企画していたところに、経済危機が重なった。

授は「正統重視の教会から

